The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	生の共同体について : ベルクソンにおける他者把握の可能性
Author(s)	吉永, 和加
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1998, 32, p. 13-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3792
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

生の共同体について

――ベルクソンにおける他者把握の可能性――

吉永和加

はじめに

他者を主題とする議論の多くは、まず自己が存在し、その自己がいかにして他者を把握するのか、という観点から行われてきた。たとえば、フッサールの『デカルト的省察』でなされた議論がそうである。しかし、この議論は、他者が志向性の対象として自己の既知の事柄から再構成される、という点で批判されることになった。そこで、マックス・シェーラーやミシェル・アンリはそのような批判を踏まえて、生き生きした他者の把握を目指し、生を根底とした共同体を想定して、そこから他者問題を考察しようとした。[1] 彼らは、自己の存在ではなく生の共同体という立場から、感情を生の発露として、感情を契機とした直接的な他者把握もしくは自己把握を試みたのである。

だが、他者問題を考察する場合に、生の共同体という観点から議論することはどこまで有効であろうか。たとえば、シェーラーの場合、自己と他者との区別が曖昧になるのではないか、またアンリの場合、自己と他者の現実的

な齟齬の説明が未だ不十分ではないか。つまり、生の共同体という出発点に立つことにより、自己と他者の確立について、さらに両者の齟齬について、問題が残されるのではないか。

本稿で扱うベルクソンもまた、生命を根本原理に据えて、「生命の飛躍」(élan vital) を通して、人間や共同体が成立すると考えている。その意味で、ベルクソン自身は生の共同体ということを特に明記していないとはいえ、彼の生命論における「個体」(individualité) の生成とその心的活動を調べることを通して、アンリらに通じる生の共同体の可能性を考察することができるはずである。そこで本稿では、ベルクソンの『創造的進化』の生命論を検討し、それを自己と他者の問題と捉え直したうえで、彼が実際に共同体論を展開する『道徳と宗教の二源泉』への架橋を試みる。そして、それをもって、ベルクソンにおける生の共同体の可能性、すなわち生の共同体を他者把握の立脚点とする可能性について考察する端緒としたい。

一、個体の生成

まず本節では、『創造的進化』[2]における生命の進化についての考察を通して、人間の個体がどのように生成するのかを検討したい。

ベルクソンによれば、私たちが生きる世界にはひとつの中心があり、世界はそこから噴出する (249/294)。この中心は噴出の連続にほかならない。これが、ベルクソンの言う「生命の飛躍」すなわち根源的な「内的衝力」(poussée intérieure) である (103/132)。そしてそれは、進化と不断の変形を推し進めていくものであり、つまり「生命進化の前方には未来の扉が開けっ放しになっている。それは運動し始めたときの力で果てしなく続けられ

る創造なのである」(106/135)。

このような見地からなされる種の進化の方向づけについて概観すれば、次のようになるだろう。ベルクソンは、植物と動物の区別から始まり、動物における頂点である節足動物と脊椎動物の区別を経て、人間へと至る進化を説明する。ただし、彼は一貫して、生命の類においてそれらを区別する特徴はない、と考える。というのも、生命の発露したある形態は、それ以外の発露形態の本質的特徴を、顕在的であれ潜在的であれ含むからである(107/137)。つまり、いかなる有機体も、生命によって貫かれているという点で、共通の根をもち、同じ衝力に推されている。したがって、類の差異は、ある特性をもつということによってではなく、その特性の割合の強弱の傾向によって定義されるにすぎない。それゆえ、たとえば、植物と動物においては、栄養の求め方の傾向によって、前者は固着性へ、後者は運動性へと導かれたのである。そして、「移動活動が意識を支えているのであって、この活動が消え去れば、意識はしぼむかあるいはむしろ眠ってしまう」(112/142)から、ベルクソンは、植物を「眠った意識」(conscience endormie)、動物を「目覚めた意識」(conscience éveillée)とすることによって、両者に一応の定義を与える。

次に、動物界に目を向ければ、そこで遂げられた進歩は、運動性に伴う神経系統の発達だとされる(127/157)。これは、大きく二つの方向に展開し、その頂点と目されるのが節足動物と脊椎動物である。前者では、移動活動は専業化した付属具に割り当てられ、その数は夥しく、他方で後者では、活動は四肢に集中し、その形に依存することが少ない。ここから、道具の必要性、および道具の制作にあたっての無生の物質に対する働きかけに差異が生じ、ベルクソンはその差異に対応する心的活動の傾向として、節足動物には本能(instinct)を、脊椎動物には知性

(intelligence) を割り当てる。ただし、ここでも「知性と本能ははじめ互いに入れ子になっていたために、起源の共通な所をいくらか残している。どちらにも純粋な状態では出会えない。…違うのは割合である」(136/168)。さらに、この知性を完全に我が物とするのが人間であるとされる (143/175)。「意識が生命の運動原理としてあらわれてくるばかりではなく、さらに意識をもつ生命そのものの中で、人間が特権的な地位を占めることになる」(183/219)。

ベルクソンは、こうした植物生活、本能生活、理性生活を一つの生命活動が成長しながら末広がりに分裂した三つの方向だと見なし、それらを発展段階だとする把握を退けている (136/167)。生命の飛躍は、収斂ではなく発散する方向に進みつつ (118/148)、ますます分岐する。様々な種は (源泉を共通とするがゆえに) 補い合い、同時に互いに競い排除し、不調和を高めていく (104-105/134)。そして、その飛躍に推されて、一つの傾向が発展しながら分解するときには、そこに生じた特殊な諸傾向は、主要傾向と両立できる限りにおいて、取り入れられて発展していくのである (120/150)。

しかし、問題は、そのような進化の過程で、いかにして個体が生じるのかということである。ベルクソンによれば、生命の流れと同時に、世界を形づくる物質の流れ、換言すれば自己解体の流れが存している。そして、「二つの流れのうち、物質は生命に逆らうが、逆われながらも生命は物質から何かを取得する。そこから両者の間にある生存方式 (modus vivendi) が生じ、これが有機組織にほかならない」(250/296)。彼は、生命を一つの「巨大な波」(onde immense) に準えて、これが一つの中心から輪を広げていき、そのほぼ全円周上で進化をやめて同じ場所での振動にかわる、と述べる (266/314)。そして、この同じ場所での渦巻きに変える契機が、物質という障

害なのである。「波が物質を運びながらその隙間に入り込む場合、物質は波をはっきりとした個体（individualité distincte）に分けることができる」（270/318）。つまり、ベルクソンにおいては、生命が物質にせき止められるという形で、個体が成立するのである。

二、自己性の確立

ところで、こうした物質による生命の個体化を、自己と他者の確立という関心から見れば、どうなるであろうか。少なくとも、自己と他者の区別は、生命の根源的飛躍を受けて、物質すなわち身体という形態の下で得られる、という一応の結論には至るだろう。しかしながら、これだけでは、自己と他者の区別は単に身体の差異に帰されることになる。ベルクソン自身も語っているように、「霊魂とは生の大河が細流に分かれ、これらが人類の身体を流れて過ぎるものにほかならない」（270/318）のであれば、自己や他者を問題にする際には、この霊魂についてこそ、その自他の差異を問題にしなければならない。したがって、先のような身体の側にではなく、霊魂、すなわち生命の流れの側に、自己性もしくは他者性の根拠を見いだす努力をすべきであろう。

では、自己や他者はいかにして見いだされるのか。ベルクソンによれば、生命の根源にあるのは意識であり（261-262/309）、「生命はありのままには心的な筋合いのものである」（258/305）。また、本能と知性という心的活動は同じ一つの原理すなわち意識が二方向に分岐し発展したものである（168-169/203,187/224）。これらのことを踏まえれば、本能と知性の方向性を追跡することが、上記の問題への手掛かりになるだろう。

ベルクソンは、この二つの心的活動をまず行動という側面から見る。彼によれば、本能とは、有機的な道具を創

作し、それを直接的に働かせるという、有機組織化の仕事そのものの延長もしくは完成である（142-143/174-175）。他方、知性とは、無機物から道具を製作し、それを間接的に働かせる能力である（*ibid.*）。したがって、本能が生命に向かうのに対して、知性は無生の物質に向かう（177/213）。次に、認識という側面において、「知性と本能とは根底から異なる二種の認識をひそめている」（144/176）。本能は特定の事物の素材そのものについての直接的認識であり、他方、知性はそれらの形式もしくは関係に関わる認識である（149-150/182）。また、本能の主題（対象）は感じられるものであり（185/207）、その意味で、本能は「共感」（sympathie）と呼ばれる（177/213）。ただし、この本能の共感は、自分の利害に関わる場合においてしか働かない。知性はこれとは対照的に、外的で中身のない認識しか有しない代わりに、利害から離れて対象を無限に設定しえ、形式の枠さえもっていればそこに無数の事物を入れ込むことができる（150/183）。その際には、無生の物質を扱うという特性から、運動を不動なものに、あるいは新奇なものを既知のものに置き換えて、再構成することになる。それゆえ、知性は新奇なものや、流動的なもの、たとえば生命を把握するには不向きである。要するに、知性は「生命に対する本性的な無理解を特徴とする」（166/200）。それに対して、本能の「最も本質的なものはありのままには生命過程である」（167/201）。

さらに、ベルクソンは次のように述べている。「仮にこの共感が対象の範囲を広げてさらに、自分自身の方に折り返る（réfléchir sur elle-même）ことができたら、生命の操作を解く鍵を私たちに与えられることになろう」（177/213）。だが、共感が本能のものであるとしても、自分自身に折り返ること、すなわち反省をなしうるのは、言語を得た知性の働きである（159/194）。そこで、「本能が利害から自由になり、自己を意識し始め、対象を反省しながらその範囲をとめどなく拡大できるようになったとして、そのような発達した本能」（178/213）のことを、

ベルクソンは直観と呼ぶ。それゆえ、続いて、直観と知性の在り方について検討しなければならない。

ベルクソンによれば、生命の根源にあるのは意識であり、「意識は人間においてのみ自己を解放する」(264/312)。知性と直観は意識作業の向かう相反する二つの方向であるが、人間において意識とはまず知性であり、「貴重な財」(biens précieux) (267/315) である直観は犠牲にされてきた。だが、「完全で充実した人間性とは、そうした両形式の意識活動を発達させ切った人間性のことであろう」(267/315)。それに続けて、ベルクソンはこう断言する。「もちろんそれと私たちの人間性との間には沢山の中間段階 (intermédiaires) が考えられ、これらは想像が可能であるあらゆる度合いの知性や直観に応じている」(*ibid.*)。この中間段階のうちに、自己と他者を区別する、個体間の心的差異が見いだされるのである。たとえば、ベルクソンは哲学者たちの間の齟齬について次のように考えている。もし直観が長続きするものであれば、哲学者相互の整合は保証されるが、にもかかわらず、現実に哲学に異種のものがあふれるのは、直観が感じられにくく、しかも一度それを得たとしても、知性的な弁証法の自己整合性の円環に閉じ込められてしまうからである。

繰り返して言えば、生命の流れにおける個体間の心的差異は、知性と直観という二方向の発展の様々な度合いに見いだされた。しかしながら、それらのうちのあるものを自己あるいは他者とするのはどのようにしてか、が再び問われなければならないだろう。残念ながら、『創造的進化』では、ベルクソンは他者性について論じていない。だが、自己性については、自己の人格形成に関する彼の記述から考察することができる。彼はそれを、生命の進化におけるのと同じ仕方で説明している。幼児期には様々な人格が融合した状態が見られるが、成長するにつれてそれらは並列不可能になり、やがて一つの人格へと分岐せざるをえなくなる。つまり、「私たちは一つの生涯しか送

れぬ以上、どれかを選ばねばならなくなる」(101/130)。

しかし、このような説明がなされるからといって、人格がある瞬間において一であったり多であったりすることはない、とベルクソンは言う。というのも、一や多というのは、物質のカテゴリーをすべてに適合させようとする知性の言語において語られる事柄にすぎず、本来は、様々な要素が相互に透入していて、自己の底では連続があるのみだからである。「私の内的生命とはそのようなものであり、生命一般もまたそうしたものなのである」(259/305)。

それゆえ、自己性の確保のためには、この自己の連続としてある内的生命がどのようなものであり、また自己がそれをいかにして知るか、ということが問題なのである。ベルクソンの考えでは、自己が自己自身に合致するには、心的活動のうちで知性のなるべく染み込まないもの、すなわち直観へと意識を集中しなければならない。そして、「自分の人格をはげしく自己収縮させることによって、私たちはすり抜ける過去を取り集め、これを緊密不可分なまでにつき進めて、やがて現在を創造させながら、現在の中に入り込む」(201/240)。このような、意志が極度に緊張し、自己が自己自身に合致した事態が「純粋持続」にほかならない。この純粋持続において、自己性が一応確保されると考えてよいだろう。[3]

三、他者把握の可能性

ここまで、『創造的進化』の生命論のうちに自己と他者の問題を立てて、個体の生成および自己性の確立について考察してきた。次に、自己がどのようにして他者を把握しうるのかを検討したい。

前節で見たように、人間の心的活動とされたのは、知性および本能、そして直観であった。それらを他者把握という観点から捉え直せば、次のようになる。物質を認識対象とする知性は、自他の区別を身体の差異によって知ることが可能ではあろう。だが、それは生命とは無縁である。他方、生き生きした対象を把握するのは本能の共感である。しかし、本能の関心の対象は自らの利害に限定されており、それゆえ、自己にとって全く新奇な存在を対象としえるかという疑問が残る。このように考えれば、ベルクソンの次の叙述は示唆に富むだろう。「知性にしか探す（chercher）能力がなく、しかし知性だけでは決して見いだしえない事物がある。それを見いだすのは本能だけであるとして、本能はそれを決して探しはすまい」（152/185）。他者性を帯びて現れる他者とは、このような事物ではないだろうか。そして、そうした事物を把握しうると考えられるのが、直観である。というのも、ベルクソンによれば、この直観は本能の共感が知性の自己反省によって発展したものであり、それゆえ利害関心から離れて生命の内奥を直接的に把握できるからである。ここにおいて、生き生きした新奇なものとしての他者を把握する可能性が一応見いだされよう。

ではさらに、その可能性を認めたうえで、他者、とりわけ人間は、より具体的にはどのようにして把握されるのか。最後にこの課題について見ていきたい。重要と思われるのは、『道徳と宗教の二源泉』[4]第三章である。そこでは、『創造的進化』での生命論が愛の概念によって展開されている。

ベルクソンは、本能においては保証されていた（昆虫に見られるような）社会が、知性的存在においては生への密着に欠損が生じて成立しなくなるから、その欠損を宗教、とりわけ動的宗教によって埋め合わせ、生の根源と一致させることで、愛に満ちた人類全体の共同体を創出する必要を説いている。ところで、彼によれば、宗教は神秘

主義にあずかるが、「神秘主義の極致は、生があらわにしている創造的努力と触れ合うこと、したがってまたこの努力と部分的に一つになることにある。この努力は神自身ではないとしても、神に発するものである」(233/440)。さらに、生の創造的エネルギーが神の本質であり、しかもそれは愛である(272-273/476)。この愛の神秘的な飛躍が人類全体に直接広げられることは不可能であるが(250/457)、選ばれた少数の人々が神からのこの飛躍を受けて、今度はこれらの人々が飛躍を人類全体へと刻み付けようとする(249/456)。彼らの直観は「生を導いて我々の存在のそもそもの根底にまで達せしめ、このことによってまた生全体の根源までも導いて行く」(265/471)。このような人々が神秘家である。

では、この神秘家を介して、愛はどのように伝えられるのか。「創造的エネルギーとは愛にほかならず、また、愛されるに値する存在を自らのうちから産み出すことを意味する」(272/478)。つまり、神はまず神秘家を愛の対象とする。だが同時に、神秘家は神を愛の対象とする[5](267/474)。そして、神との完全な合一においては、「愛するものと愛されるものとの間には、もはや根本的な分離はない」(233/452)。ただし、「神との合一がどれほど緊密であっても、それは全面的とならぬ限り、まだ最終決定的なものではない」(244/451)。つまり、神の現前における限りない歓喜にあり、神のうちに没入しているとしても、それでも魂の一部が外に残される。これが「意志」(volonté)である(244/452)。そして、この意志が神とのさらなる合一を目指して運動するのが、人間の魂の在り方にほかならない。いずれにしても、神秘家は、神の愛を受けて自らが神との合一を果たしたのと同じ仕方で、その愛を神秘家以外の人々へ伝えていく。つまり、「神秘家の愛の方向は、生の飛躍の方向とひとつ」(249/456)であり、「神を通して、また神によって、彼は全人類を神の愛をもって愛する」(247/454)。こうして、愛が、神

秘家を介し、宗教を通して、人類全体へと広がるとき、理想の共同体が創出されるのである（247/455,252/459）。

以上が、ベルクソンによる、愛すなわち生の創造的エネルギーに基づく共同体の議論である。ここにおいて、他者把握についての、より具体的な可能性を見ることができる。まず、ベルクソンは、愛が「愛されるに値する存在を自らのうちから産み出す」と述べていた。だとすれば、他者は、愛においてこそ対象として見いだされると言えるだろう。ここに、知覚によらない他者把握の契機があると思われる。次に、愛が伝播される過程で愛する者と愛される者との合一は不完全なものにとどまり、それゆえ愛される者のうちに意志が残される、というのがベルクソンの見解であった。この意志こそが他者性ではないだろうか。つまり、愛の共同体においても、意志の残存という形で、他者の他者性が保持されると考えられるのである。

おわりに

以上のように、『創造的進化』での生命論を中心に、自己と他者の問題について、個体がいかにして生成し、それがどのようにして自己性を得て、他者を把握しうるかについて考察してきた。便宜上このような順に従って他者把握の問題が論じられたことは、一見したところ、フッサール流の議論の進め方と似てはいる。しかしながら、その内実がフッサール的な把握とは全く異なっていたことは明らかであろう。というのも、ベルクソンは、自己や他者を孤立的な存在ではなく、生命の飛躍にあずかり、生の共同体を根底にもつ存在と捉えて、両者の心的差異を知性と直観の度合いから説明していたからである。自己の自己性が得られるのも、生命全体を背景にした純粋持続においてであり、また他者を把握しうるのも、生命過程そのものである本能が発達した直観によってであった。さら

に、『道徳と宗教の二源泉』では、生命の創造的エネルギーが愛と置換されることによって、知覚の対象としてではなく、愛の対象としての他者が見いだされた。こうしてベルクソンにおいて、他者は、愛すなわち生の創造的エネルギーにおいて対象とされ、生の直観によって生き生きした新奇なものとして直接的に把握されうるのである。

したがって、生の共同体という立場から他者把握を考えるアンリやシェーラーと同様に、ベルクソンもまた、生の共同体を根底に据えることで、知性による他者の構成を逃れ、生の直観による直接的な他者把握の可能性を得て、そしてそこから、自己と他者の直接的な一致を理想としてもつことができる。実際に、『道徳と宗教の二源泉』では、生の共同体を基盤として、調和的な社会が理想として描かれている。しかしながら、他方、人間は第一義的には知性的存在であり、「知性の薦めるものはむしろ自己本位（エゴイズム）の態度である」（222/428）と、ベルクソンは認めている。さらに、知性の道具であり共同作業を可能にする言語が、自己と他者の齟齬を生じさせることも予想される。したがって、ベルクソンが描く愛の共同体と現実の社会の間には当然のことながら距離がある。そこで、『道徳と宗教の二源泉』においてこの距離を埋めてゆく作業が必要となるだろう。

注

（1）拙論「アンリのシェーラー批判に見る他者把握の問題」（大阪大学文学部哲学講座編『メタフュシカ』第28号、1997、pp.29～46）を参照されたい。

（2）Henri Bergson, *L'évolution créatrice*, Presses Universitaires de France, Paris, 1941.／真方敬道訳『創造的進化』、岩波文庫。（以下、本文中の括弧内に参照箇所の頁数を原典／邦訳の順に記す。）

（3）ただし、ベルクソンは、純粋持続における自己の自己自身への合致には程度の差があることを認めている（201/240）。

たとえば、完全な合致においては、生命は「自己自身と共感する一つの全体」(168/203) であり、自己の内的生命は根源的な生命全体に至りうる。それゆえ、先の自己性には揺らぎの可能性があると考えられる。

(4) Henri Bergson, *Les deux sources de la morale et de la religion*, Presses Universitaires de France, Paris, 1932.／森口美都男訳『道徳と宗教の二つの源泉』、「世界の名著　53」、中央公論社。(この項以下、本文中の括弧内に、この著作の参照箇所を原典／邦訳の順に記す。)

(5) ただし、ここで言われている対象は、知覚における対象のことではなく、生きた経験において現れる存在のことである (255/462)。

(文学部助手)